戦後日本の植民地主義と文明論
―梅棹忠夫の「北海道独立論」―

葛　西　弘　隆

われわれはこれまで、おなじ日本人を主体としながらべつべつの国をつくりうるという可能性を、あまりかんがえてみたことはない。しかし、北海道にはその可能性がある。

梅棹忠夫 [1]

1.　開拓と植民地化のあいだ

北海道札幌市の東、野幌という町に北海道開拓記念館がある。北海道開拓100周年を記念して1971年に設立された道立の博物館である。この博物館を訪れて北海道史の展示を見学したときのこと、明治初期の開拓を扱うセクションで思わず足が止まった。入り口にはテーマを表わす大きなボードがあり、日本語で「開けゆく大地」という題目が記されている。そしてその文字のすぐ下には、英語で“Progression of Colonization”という文字が添えられていたのである[2]。文字の配置からして、それらは展示の主題を示すひとつの意味内容を二言語で表記したものにちがいないと思われた。いうまでもなく、「開けゆく大地」がいわゆる「開拓」もしくは「拓殖」の語意と推測されるのにたいして、“Progression of Colonization”は「植民地化の進展」を意味するため、翻訳としては違和感がある。しかし、それが誤訳、つまり意味の取り違えによる意図せざる語句選択の誤りでないことは、個々の展示内容に添えられた日英両方の説明文をみると明らかだった。たとえば、「開拓使」は“Colonial Department”、第二次世界大戦敗戦直後に行われた「緊急開拓事業」は“Emergency colonization projects”という具合に、訳語の選択に一貫性がみられるのである。

たしかに、開拓・拓殖としての北海道史については高校の歴史教科書にも記述され、「日本史」の一部とされてきた。また、歴史学では、近代北海道史を内国（国内）植民地という概念を用いて捉えるアプローチがある[3]。そのことを知りつつも、このふたつのことばが「ひとつの意味」、翻訳における等値として提示されていることに興味を覚えたのだった。社会科見学で訪れる子供たち、そして一般の大人たちは、はたしてこのことに気づくのだろうか。

北海道にかかわる近年の思想史研究では、近代国民国家と帝国主義、植民地主義と人種主義、そしてグローバリゼーションの諸問題を視野にいれた検討が進んでいる[4]。アイヌをはじめ先住民の歴史的経験に焦点をあてつつも、問題提起の射程は狭義のエスニック・マイノリティ研究、地方・

---

[1] 梅棹忠夫「北海道独立論」、『梅棹忠夫著作集』第7巻（中央公論社、1990年）、168頁（初出は「北海道独立論――根釧原野」、『中央公論』1960年5月号）。

[2] 北海道開拓記念館は2013年に閉館し、展示内容をふくむ大規模改修を経て、2015年に北海道博物館としてオープンした。北海道開拓記念館の刊行物にも同様の記述がある。「テーマ5　開けゆく大地」、「THEME 5 Progression of Colonization」、北海道開拓記念館編『北海道開拓記念館総合案内』改訂新版（北海道開拓記念館、1993年）、46、97頁。ただし改修後の北海道博物館では、「開拓」は“Settlement and Development”と表記されている。

[3] 内国植民地と北海道をめぐる史学史については以下参照。今西一「帝国日本と国内植民地・北海道」、今西一編『世界システムと東アジア――小経営・国内植民地・植民地近代』（日本経済評論社、2008年）、132–148頁。

地域史としての北海道研究の枠組みをはるかにこえて、「開拓」や「文明化」をつうじて展開する北海道の近代が、いかに近代国民国家日本の歴史的・文化的正統性と、それを支えるイデオロギーとしてのナショナリズム・人種主義・植民地主義にかかわってきたのかを問いなおすところにおよんでいる。「辺境」の問題化をつうじて、「近代」や「戦後」の「日本」として語られ解釈されてきた認識の枠組み、国民共同体のアイデンティティに正統性を与えてきた知＝権力の編制があらためて問い直されるようになってきたといえる。

こうした問題関心を背景として、この小論では、戦後日本の代表的な人類学者、民族学者として知られる梅棹忠夫の北海道論、「北海道独立論」（1960年）をとりあげる。グローバルな文明論を展開したことで知られる梅棹が、なぜ北海道について語り、どのような道筋で北海道の独立国家樹立を主張したのか。彼の仮説を支える問いの枠組みについて、とくに北海道の戦後に注目して政治思想史の観点から検証することにしたい。論文のタイトル「北海道独立論」が示すように、この論考で梅棹はまちがいなく北海道の独立の必要性と可能性を提起した。それは、当時としては特異な、文明論というアプローチからの北海道独立国家論として読むことができる。けれども皮肉なことに、北海道独立という刺激的な主張は、彼の世界史と文明の理解、より具体的には日本文明の優位性を裏書きする典型的な国民国家論のなかに回収されることになる。彼自身の主張においては、北海道の主体性とでもよぶものの重要性が強調されているにもかかわらず、その語りがじつは彼自身の文明論の一部として、より根源的なところで植民地主義を不可欠とする国民国家とナショナリズムの言説構造のなかにあり、究極的には文明論という名の戦後日本の文化ナショナリズム、いわゆる「日本文化論」の論理として作用してしまうのである。

以下本論では、まず戦後北海道史との関連で彼の北海道観を概観したうえで、独自の文明論にもとづく北海道の政治的独立の主張について考察する。とりあげるテクストは限られているものの、議論の射程は梅棹忠夫という人類学者個人の思想の評価のみならず、北海道をめぐる現在の状況や、戦後日本の国民共同体の編制と政治的同一性をめぐる現代的な問いを考えるための手がかりを与えてくれると思われる。

2. 戦後北海道と「北海道独立論」

1920年に生まれた梅棹忠夫は、戦時中の京都帝国大学理学部で動物学を学んだ。すでに高校時代に山岳部で活動し、戦時中から探検家として大日本帝国の「辺境」地域の探検・調査に数多く携わった。以後、人類学者、民族学者として精力的に活躍し、そのフィールドはアジアからアフリカまでの広大な地域におよぶ。研究者としての梅棹の名前は、1957年に発表された「文明の生態史観」の著者としてよく知られているだろう[5]。彼は「文明の生態史観」において動植物の生態分析の概念と方法を歴史文化研究に導入し、発展段階論にもとづくマルクス主義の唯物史観に対抗する歴史解釈の枠組みを、「生態史観」というグローバルな歴史・文明論として提示した。それは西洋と東洋の二項対立にもとづく地政的空間配置を批判し、主として歴史的過程としての封建制の有無をメルクマールとする第一地域・第二地域の区分にもとづいて文明の平行進化の仮説を提起するもので、日本を西欧と同じく文明化の進む第一地域に位置づけた。加藤周一の「雑種文化論」とともに、しばしば1950年代の日本文化論の代表的な作品のひとつとして読まれてきた。

「文明の生態史観」仮説が反響をよんで数年後の1960年春、日本全国が日米安全保障条約改定問題に揺れていた頃に、梅棹は北海道を訪れ、道東にひろがる根釧原野のパイロットファームを対象とする社会学のフィールドワークに参加した。論文「北海道独立論」は、その旅で得た知見をもとに、雑誌『中央公論』に連載中の「日本探検」

---

[4] 以下参照。テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める――アイヌが経験する近代』（みすず書房、2000年）。北海道における植民地主義の近代性に焦点をあてた最近の研究として、平野克弥「アイヌ＝『滅びゆく民族』と生存への祈り――コロニアルな翻訳」、『みすず』2016年8月号、6–23頁。

[5] 梅棹忠夫『文明の生態史観』（中央公論社、1967年。初出は「文明の生態史観序説」、『中央公論』1957年2月号。『梅棹忠夫著作集5 比較文明研究』（中央公論社、1989年））。梅棹は、一般書としてひろく読まれる「知的生産の技術」や、国立民族博物館の設立事業など、長いキャリアのなかでアカデミアの枠をこえた「知の巨人」とよばれることになる。梅棹の経歴については以下参照。山本紀夫『梅棹忠夫――「知の探検家」の思想と生涯』（中公新書、2012年）。

第三弾として発表された。論文は北海道の近現代にかかわる多様な歴史的事件、政策、思想をとりあげており、議論は多岐にわたる。総合雑誌に掲載される論文としてはかなりの長編で、当時開発が進んでいた根釧パイロットファームの観察にはじまり、北海道開拓の歴史的評価、文明論としての北海道思想史の解釈へと進み、最終的に北海道独立の可能性と条件にまで言及する構成となっている。全体を貫く主題は、「日本文明にとって、北海道はいかなる存在であるか。日本文明とのかかわりにおいて、北海道の理想と運命」を考えることにあった[6]。この論考は文明論として書かれた北海道についての、そして北海道と内地の関係をめぐる歴史思想研究となっていると同時に、現代日本の政治共同体の編制についての政治的提言までふくむ点で興味ぶかい。

梅棹の北海道論でまず読者の注意を引くのは、彼が北海道を一貫して近代日本（内地）の植民地として捉えていることである。しかも、植民地として北海道を理解するその視点は、徳川期の松前藩をつうじた支配から明治期以降、戦前まででではなく、戦後（この論文が執筆された1960年当時も）をふくんでいる。いいかえると、北海道をとおして「戦後日本の植民地主義」の問題を論じていると読むことができる。

関連して、彼の北海道観を根底で規定している注目すべき第二の特徴は、北海道を移住・移民開拓の地と捉える点にある。彼は基本的に北海道を内地からの移住者により構成された社会として解釈している。先住民への言及はあるものの、議論全体のなかに占める位置はきわめてちいさく、関心の焦点は移住者の政治共同体としての北海道の文明論的意義にあった。以上のような、植民地として、そして移民の地として北海道を捉える彼の視座は、後述するように、文明という彼の概念構制により規定されるところがおおきいと考えられる。

最初に、北海道の戦後史（現代史）をめぐる梅棹の理解を概観しておくことにしよう。彼は戦後の北海道を、「辺境化」と「内地化」の同時進行として解釈する（「辺境」概念については、ここでは梅棹の用法をそのまま用いる）。興味ぶかいことに、彼は北海道が（戦前にもまして）第二次世界大戦後に日本の「辺境」になったと解釈した。北海道の戦前・戦時と戦後を分かつのは、いうまでもなく帝国の政治的境界としての「国境」の変容である。梅棹にとって、地政的には、戦前の北海道は千島・樺太への中継地点であり、帝国の版図の「境界」や「終着駅」ではなかった。戦前には港湾商業都市の小樽が内地と北方の外地を結ぶハブとして栄えたことは知られている。実際に戦時中の梅棹の北海道訪問は、樺太への遠征の途中であった。彼は当時の北海道と札幌の印象について次のように描く。

> 札幌は、以前はいわば、ただの都市であった。いくらか開拓地的様相をのこしているにせよ、その規模に大小があるにせよ、とにかく日本列島の北部における諸都市群のなかのひとつだった。ここからさきには、まだ旭川があり、大泊があり、豊原があり、敷香があった。わたしは、北海道をとおってカラフトへいったことがある。わたしはそのとき、札幌をすどおりした。カラフトという存在をかんがえにいれるとき、北海道は単に通路でしかなかった。開拓前線はカラフトにあった。札幌は、いわば中継基地にすぎなかった[7]。

しかし第二次世界大戦敗戦により大日本帝国は崩壊し、樺太（サハリン）、千島（クリル）の支配権を失う。その状況のもとで、戦後の日本政府は開拓の対象としての北海道の利用価値を再発見した。「カラフト・千島をうしなって、日本の開拓前線は大はばに後退し、ふたたび北海道内にもとめられることになった」[8]。もっとも、その動きはすでに敗戦前から始まっていた。1945年5月、「北海道疎開者戦力化実施要項」が決定され、食糧増産と北方の防衛を目的として拓北農兵隊による移民・植民政策が導入される[9]。そして8月の敗戦をはさんで同年11月には緊急開拓事業実施要領が閣議決定された。要領はその目的を次のように述べる。「終戦後の食糧事情及復員に伴う新農村

---

[6] 梅棹「北海道独立論」、146頁。
[7] 同前、113頁。
[8] 同前、131頁。
[9] 実質においては、1945年3月の東京大空襲を背景として、東京とその周辺からの疎開の意味が濃いものだった。

建設の要請に即応し大規模なる開墾、干拓及土地改良事業を実施し以て食糧の自給化を図ると共に離職せる工員、軍人其の他の者の帰農を促進せんとす」[10]。敗戦と帝国の喪失にともない、「外地」、すなわち戦場や旧植民地、占領地からの復員や引揚げによる大規模な人口移動が発生していた。しかし、1930年代後半から貧困のなか国策にしたがって移民を送り出した内地の地域共同体・農村には、しばしば戦後の混乱のなかで、帰還した人びとを養うだけの土地と食糧が不足していた。「故郷」に帰還したものの地域共同体から受け入れられず、新たな入植地を求めてさらに集団移住した例も知られている[11]。北海道の開拓地＝植民地としての政治的価値について、梅棹はいう。「それ［植民地の喪失］にくわえて、戦後の食料不足、人口問題である。人びとは北海道をしゃにむに『開拓地』に仕たててしまったのだ。人びとは、あたらしい移住植民地として北海道に期待をかけた」[12]。こうして敗戦にともなう帝国の喪失と人口移動、食糧難を背景として、旧樺太・千島はもちろんのこと、「外地」からの引き揚げ者を吸収する役割を担うことで、移住開拓地としての北海道の新たな植民地化が開始された。梅棹は、この過程が戦後北海道の辺境化を進めることになったと解釈する。

> いまや、カラフトはない。北海道は、そして札幌は、それ自身が「終着駅」化したのである。戦後の札幌は、大都市として成長するとともに、北のはての都という性格を、ますますつよめてきたのである。そして、北海道そのものも、あらためて日本のあたらしい「辺境」という役わりをになわされることとなった。すくなくとも、ほかのすべての辺境をうしなった内地の人たちは、北海道にあたらしい「辺境」の夢をおいはじめた。奇妙なことだが、北海道の辺境化は戦後にはじまるのである[13]。

こうして北海道は北の「辺境」として、実質においては、帝国から戦後国民国家への変質の過程における「植民地なき時代の植民地」とでもよぶべき地位を、内地から与えられることになった。梅棹によれば、「アイヌとクマ」に象徴される北海道の「辺境性」のイメージもまた、戦後のものだという。「アイヌとクマ」は、与えられた辺境としての位置を北海道の人びとが内面化し、北海道を内地にむけて「商品化」する際に用いられたアイコンというわけである。

そのいっぽうで梅棹は、北海道の戦後が辺境化とともに内地化の歴史でもあったことを指摘する。たしかに、梅棹が北海道の内地化とよぶ事態は、戦後の日本政府が北海道を対象に進めた産業開発政策をつうじてその性格を跡づけることができる。

前述のように、植民地喪失後にあらためて北海道の政治的・経済的価値を発見した戦後の日本政府は、初期の緊急開拓につづき、1950年に「北海道開発法」を制定した。その目的は以下のように述べられる。「国は、国民経済の復興及び人口問題の解決に寄与するため、北海道総合開発計画を樹立し、これを実施する」[14]。この法律にもとづき東京に北海道開発庁が、その下部機関として札幌に北海道開発局が設置され、翌年には第一次北海道総合開発計画が策定された。北海道総合開発計画はその目的を次のようにうたう。「戦後四つの島にとじこめられたわが国において、豊富なる未開発資源と広大なる地域を有する北海道の開発は、経済自立の問題、人口問題の解決併せて国民の志気の問題等よりみて絶対推進すべきことがらである。これが北海道開発の目的である」[15]。こうしてかつての開拓はいまや開発と名前を変え、北海道は戦後日本の新たな国家政策の投資の対象として組み込まれていった。

---

[10] 「緊急開拓事業実施要領」、北海道戦後開拓史編纂委員会編『北海道戦後開拓史』（北海道、1973年）、29頁（旧かなづかいは改めた）。

[11] 復員・引揚げ者数は軍人、民間人をふくめ660万人にのぼる。成田龍一『「戦争経験」の戦後史――語られた体験／証言／記憶』（岩波書店、2012年）、84頁。旧満蒙開拓移民が戦後に戻った「故郷」からさらに集団移住した例として、長野県大日向村のケースが有名である。

[12] 梅棹「北海道独立論」、131頁。

[13] 同前、114頁。

[14] 「北海道開発法」、『新北海道史』第6巻通説5（北海道、1977年）、349頁。

[15] 「北海道総合開発計画」、同前、362頁。

以後、北海道開発は策定された五カ年計画をもとに多額の国家予算を投じて進められていくことになる。たとえば、第一次北海道総合開発計画の構想を描いたポスターには、「430万人の協力で」「豊な北海道を！」「本道開発五カ年計画の構想」「日本経済の復興と自立のために」といった表現が踊る。そして具体的な開発事業として、食糧生産の増強、地下資源の調査開発、交通の整備、電源開発の四つが絵によって示されるといった具合である[16]。

梅棹の観察によれば、政府主導の開発をつうじた戦後北海道の内地化は、先にみた辺境化のプロセスと重なりつつ、北海道のありかたを確実に変えていった。たとえば札幌について、戦時中の印象と比較しつつこう述べられる。

> 札幌はたしかにかわったようだ。二〇年まえ、わたしがはじめてこの都市をおとずれたころは、札幌はまだ、なんとなく開拓地的な空気をもっていた。街路はたしかに近代都市らしくひろびろとしていたが、それに見あうだけの建築もすくなく、かえっていかにも新開地的な空虚さがあった。……札幌は内地化したのである。内地にも数すくないほどの、内地的近代都市になったのである。それはもはや、開拓地都市というようなものではない。戦後の北海道は、そして札幌は、そのあたらしく発見された価値、異国性と辺境性を売ることによって、じつは、いっそうふかい内地化をおこないつつある、とわたしはみたのであった[17]。

このように、戦後の北海道では、北方の境界となったことによる辺境性の強化が開発による内地化と連動し、戦前とは異なる形態において植民地化が進んできたと、梅棹は捉えている。それは、内地主導で開発が進めば進むほど地域のイニシアチブが失われること、すなわち植民地支配の構造が徹底することを意味するだろう。

梅棹は、1950年代のこうした一連の北海道開発事業が、政府の政策としては成功したと評価する。しかし同時に、国策としての実績を認めつつも、彼は北海道の現状に根本的な疑問を抱いていた。それは、エッセイの前半に記される根釧パイロット・ファームについての観察にはっきりあらわれている。根釧パイロット・ファームは、日本政府が世界銀行の融資を受け、1955年から道東の根釧原野を開拓して大規模酪農経営を導入する事業だった。それは、道東の内陸に広がる冷涼で農作には不適とされる森林を機械により開墾し牧地化したうえで、当時としてはめずらしいジャージー種（ホルスタイン種ではなく）の乳牛をオーストラリアから輸入して酪農の産業化を進めるという、実験的色彩のつよい国策開発である。梅棹は、1960年の調査で中春別の近くの床丹地区で実態を目にし、このパイロット・ファーム事業が、多くの困難に直面しながらも軌道にのりつつあることを認めた。そのうえで次のように疑問を呈する。

> 根釧原野は……安定した農業が成立するための条件を欠いている。ここは、ひろいけれども、あるのは面積だけである。北海道には、まだ広大な未開拓地がある、というわれわれのおもいこみは、まちがっているようだ。たしかに地図をみると、おおきな原野がいくつか残っている。しかしそれはみんな、谷地か、火山灰か、気候条件が劣悪か、なんらかの決定的な欠陥をもっているところばかりである。ふつうの方法で拓ける土地は、もうと

---

[16] 「北海道総合開発計画ポスター」（1951年、北海道博物館所蔵）。梅棹も言及するように、政府の第1次北海道総合開発計画にたいして、1957年に産業計画会議が痛烈な批判を提起した。そこに北海道大学教授で雪の結晶の研究で知られる物理学者、中谷宇吉郎が「北海道開発に消えた八百億円――われわれの税金をドブにすてた事業の全貌」（『文藝春秋』1957年4月号）を発表し、北海道開発論争が起こった。産業計画会議の委員長は「電力王」とよばれた松永安左エ門だった。産業計画会議については、北海道にとどまらず戦後日本の開発をめぐる政治経済思想の点で興味ぶかい論点がふくまれており、稿を改めて検討したい。産業計画会議編『北海道の開発はどうあるべきか――産業計画会議のリコメンデーションとその反響』（ダイヤモンド社、1957年）。

[17] 1960年代に植民地としての北海道に関心をよせたいまひとりの知識人として、花森安治の名前をあげることができる。彼は「開拓者精神」（フロンティア・スピリット）に着目して、北海道の特異な歴史的性格と植民地都市としての札幌の変化を情感をこめて描き、現代日本社会批判へと展開した。花森安治「雪と土と星の町――日本紀行その3　札幌」、『暮しの手帖』第1世紀73号、1964年、5–31頁。以下の単行本に改題のうえ再録。花森安治「札幌」、花森『一銭五厘の旗』（暮しの手帖社、1971年）。

っくにひらきつくされていた。根釧原野の開拓は、こういう不適格地に対する、機械力による強引な開拓なのである。わたしの疑問は、こうである。なぜこんなひどい土地まで開拓しなければならないのか。むりをしてひらかなくても、原野のまま、ほっておいたってよいではないか。……巨額の国費を、こういうアクロバティックな事業につぎ込むことの意味を、疑問におもったのである[18]。

ここでは端的に、根釧原野の開発は無駄という痛烈な見解が提出されている。たとえパイロット・ファーム事業が一定の成果をあげているとしても、コスト・ベネフィットの観点からは割に合わず、政策としての合理性が認められない。この判断の背後には、彼の農業にたいする評価があった。というのも、彼は1960年の時点で、すでに産業としての日本の農業には将来性がないと考えていたのである。「内地では、農業はあきらかに斜陽産業である。農業人口は、おおきく減少しつつある。ところが北海道では、まだこれから開拓をやろうとしているのだ」[19]。その批判は政府にたいしてだけでなく北海道の人びとの気質にもむけられ、「わたしは、北海道の人たちが、なぜ、これほどまでに、農業に執着するのか、それがわからない」とまで記している。梅棹は、北海道の人びとに伝統的にみられる農業にたいするつよい情熱を、時代遅れの「重農主義」として批判する。

このように、近代初期以来、内地からの移住により開拓されてきた（と梅棹が考える）北海道は、第二次世界大戦後になると開発政策をつうじた新たな植民地化（内地への従属）が進展していると評価される。そして彼は、農業の限界という論点を経由して、「開拓時代はとっくにおわっている」、すなわち植民地としての北海道の「発展」はすでに限界に達しているとの認識に到達する。

3. 「北海道思想」——四つの選択肢

「北海道独立論」の後半部分では、北海道の将来に直接にかかわる主題が論じられる。その際に、あらためて北海道と内地との関係に焦点があてられていることは重要である。彼は、北海道への政府の関心が一貫して「日本の将来にとって北海道はいかにあるべきか」にあり、「北海道の将来にとって北海道はどうあるべきか」という視座を欠いていると断じる。この批判は、ただちに地域・地方の主体性、いいかえれば「植民地」の主体性という、政治体制に直結する論点、すなわち政治共同体の正統性にかかわる問題を惹起するだろう。梅棹はいう。「植民と開拓は、見事な成功をおさめた。……本国に肩を並べるような、立派な文明社会が成立した。……ただひとつ、北海道がなしえなかったことは、本国からの政治的独立であった。それは、今後の北海道に残されている最大の課題ではないだろうか」[20]。

北海道の政治的独立を語る前提として、梅棹は、日本の領土の他の地域とは異なり、北海道については「北海道思想史」が成立すると考えていた[21]。そして彼は、明治期以来の北海道観の思想史的な系譜を参照しながら、北海道と内地の思想的対立構造を、政治における分離と統合、文化における異質と同質という二つの軸で図式化する。それによると、北海道と内地の関係は以下の四つに分類される。

1　異質・統合
2　異質・分離
3　同質・統合
4　同質・分離

第一の志向は、北海道と内地の文化的な異質性

---

[18] 梅棹「北海道独立論」、130–131頁。農業開拓以外の目的として想定される、ソ連に対する防衛という軍事的目的についても、「立木をきりはらって、そのかわりに民をうえる」こと、すなわち文字どおりの「植民」でしかなく実効性がないという。

[19] 同前、131頁。

[20] 同前、148頁。

[21] その理由は以下のように説明される。「日本の思想史のうえで、北海道という土地は、きわだった性質をしめているように、わたしはかんがえる。……中央の思想界からはなれたところで、北海道の土地そのものに関した独特の思想を、この土地ははぐくんできたからである。日本の各地方のなかで、その地方の理想と運命についての想念を、北海道ほどゆたかに、そして体系的に展開しえた例がほかにあったであろうか。東海思想とか九州思想などというものは、いってみたところで、実質的な内容が存在しえるものではない。しかし、北海道思想は存在するのである。日本思想一般ではおおいつくせない、独特の思想が、ここにはあるのである」（同前、134頁）。

を強調したうえで政治的統合をはかる思想とされる。その代表例は明治期の開拓政策の柱をつくったホーレス・ケプロンと黒田清隆の構想にみられるという。それは北海道を大日本帝国の領土として確立し、中央政府の指導により開発政策を進める統合主義（同化主義）と評価される。政治的には、「新生した大日本帝国の領土として北海道を確保し、強力な中央政府の直接指導のもとに開発を進めるという点で、あきらかな統合主義であった」[22]。

しかし同時にこの志向は、北海道が内地とは異なる自然環境におかれているとする異質性の認識にもとづいて、文化的には内地と異なる生活様式および文化形態の構築をめざすものだったと指摘される。たしかにケプロンや黒田をはじめ初期の北海道開拓政策は、内地とは異なる北海道の自然環境をふまえて、アメリカ合州国、とくにニュー・イングランドの農業技術を導入したことが知られている。開拓使の設立、ウィリアム・クラークをはじめとする札幌農学校から北海道帝国大学へと連なる知識と技術の系譜は、そのことを物語っている。その流れは西欧式農業の応用、酪農の重視、デンマーク農業の受容へと連なっていく。

梅棹は、この理想主義的文化主義をめぐって、内地と北海道では近代性（モダニティ）に与えられる意味に違いがみられることに注意をうながす。内地では「近代主義は単なる時代の推移の一般的原理であって、空間性・地理性をもたない」のにたいして、北海道では「近代主義が、北海道の風土そのものとむすびつけて理解された」[23]。そのために、北海道では近代主義が「いっそう本質的な全生活の展開原理」を意味することになった。結果として北海道の近代主義は工業化や都市化につながるのではなく、農業、しかも米作よりむしろ酪農の重視へと結びついた。理想主義的文化主義は北海道近代の特殊性を重視する思想として作用してきたというのである。

第二の志向は、内地との文化的異質性を強調し、かつ政治的な分離を求める思想とされる。19世紀後半以降、開拓が進むにつれて、道庁、政界、そして大学に北海道土着の意識をもつエリートが形成されていき、道庁をはじめ中央政府の出先機関の役割は変質した。彼らは次第に内地や政府にたいして北海道独自の利害を主張するようになる[24]。そのなかから、北海道は内地と政治的にも文化的にも異質であるとの認識にもとづく集合的アイデンティティへの意識が出現した。梅棹はこの志向をとくに「北方主義」、「北方文化」論者にみいだし、代表的な例として河野広道の名前をあげる。河野広道は、北海道庁の官僚出身で北海道史学の確立に主要な貢献したと評価される河野常吉を父にもち、北方の昆虫学を専門とする自然科学者で、考古学や民族学の分野でも活躍した。彼は戦時中に「北方文化」論を主導して「北方」の文化的独自性の創造をめざし、敗戦後には「北海道自由国」論を提唱して連邦制にもとづく北海道の政治的独立を主張した[25]。梅棹は、北海道でこうした文化論が出現する背景を、次のようにみる。「終戦直後には、日本の各地において、なかば冗談のように、なになに独立論が論議された時期がある。四国独立論から屋久島独立論まであった。そのおおくは、要するに中央政府の制約をうけたくない、という程度のものであった。しかし、北海道における独立論の底流には、もっと根ぶかいものがあったのである。北海道異質主義者たちは、単なるプロヴィンシャリストではない。かれらには、北海道のもつ地理的特殊性の文明史的自覚があった」[26]。

22　同前、166 頁。

23　同前、139 頁。なお、梅棹の北海道論の背景のひとつとして、イギリスの歴史学者、アーノルド・J・トインビーの来日があった。トインビーは「北海道」と題されたエッセイで、北海道の文化的異質性を西欧化の文脈で肯定的に評価した。梅棹の理想主義的文化主義への評価からもわかるように、梅棹はこの点についてトインビーに批判的である。トインビー「北海道」、『東から西へ――世界周遊記』長谷川松治訳、『トインビー著作集 7 歴史紀行』（社会思想社、1967 年）、117–120 頁。

24　梅棹は、北海道にはそうした「つよい自己志向性のながれ」があるという（梅棹「北海道独立論」、169 頁）。

25　河野広道「北海道自由国論」（1946 年）、河野『続北方文化論 河野広道著作集 II』（北海道出版企画センター、1972 年）。北海道の政治的独立のまとまった主張としては、しばしば戊辰戦争期の榎本武揚による「蝦夷共和国」論と、河野広道の「北海道自由国」論が参照されてきた。河野広道については以下参照。百瀬響「北進と民族学――河野広道の軌跡を通じて」、中生勝美編『植民地人類学の展望』（風響社、2000 年）、71–121 頁。

26　梅棹「北海道独立論」、141 頁。

梅棹は、河野の思想に北海道の文明史的意義という問題意識がみられることを評価しつつも、その政治的・文化的異質主義の「自覚」への期待とは裏腹に、北海道独自の文化的アイデンティティ構築への可能性が現実の歴史においてつねに裏切られてきたことを指摘する。「善意にみちたエリートたちの理想にそむいて、内地からわたってくる民衆は、くりかえし同質化の波をもたらす。北海道は現実には、とうとうたるいきおいで内地化した」。梅棹は、北海道には北方主義者のロマン主義的な夢が実現する歴史的条件は、かつてもいまも存在しないと考えたのである。

北海道と内地の関係における文化的異質性と政治的統合、文化的異質性と政治的分離というふたつの思想のありかたには、ひとつの共通性があるという。それは農業をつうじた近代化への志向である。その農業も、米作中心の内地とは異なり酪農を重視するものであることに、梅棹は注目する。すでにふれたとおり、彼は農業、とくに酪農をつうじた社会発展の可能性に否定的だった。北海道で「米作は完全に成功し、したがって日本人はその基本的生活様式をかえることなしに、北海道に植民することに成功したのであった。その点をこそ評価しなければならない」[27]。彼の評価にしたがうと、結局のところ、文化的異質性の認識にもとづいて農業を重視する北海道理想主義は、政治的独立を志向するにせよしないにせよ、失敗と挫折が運命づけられている。

第三の志向として梅棹があげるのは、内地と北海道を文化的に同質であると捉えたうえで、政治的にも統合を進める思想である。彼はこれを「官僚的現実主義」とよぶ。北海道と内地の文化的異質性をいっさい認めず、内地との政治的統合を進める論理は、戦後の北海道開発政策に典型的に表現されているものである。梅棹はこの官僚的現実主義が、「北海道に異質の文化が成長することなど、はじめからかんがえてもいないし、内地に対する従属という線でしか北海道をみていない」ときびしく批判する[28]。なぜなら、北海道開発庁の設立から根釧パイロット・ファーム事業にいたるまで、東京政府による戦後の北海道開発は、経済的収奪と軍事的植民という一貫した動機によって支えられてきたからである。梅棹は1951年の北海道開発法が「国民経済の復興及び人口問題の解決」を目的とすることにふれて、「現在、および未来における北海道の住民たち、そして将来、ここに展開されるであろうところの北海道の文明に対しては、日本中央政府はなんらの考慮も払っていないのである。各国の開発法案で、開発対象地域の住民の福祉と利益に言及していないのは、世界じゅうで、日本のこの法律ただひとつだ」と日本政府の態度を切り捨てている。

政治における統合・分離、文化における同質性・異質性というふたつの軸にもとづくマトリクスで最後に残る第四の志向が、文化的同質性と政治的独立の組み合わせである。梅棹はこれを北海道の「独立への道」として支持する。彼は北海道独立の必要性を、あらためて内地との関係で次のように説明する。

> 歴代日本政府の北海道に対する無理解さ、無責任さは、驚くべきものがある。このような政府のもとに、内地中心の統治をうけつぐことは、北海道にとっては、あまりにロスが多いのではないか。はっきりと、北海道の北海道人による、北海道のための、独立の政府をもつことを考えたほうが将来のためにはよいのではないか[29]。

ここでは、北海道の人口を政治的主体とする政府を創設する必要性がはっきりと主張されている。ただし梅棹は、この独立論の主張が「内地との同質化を前提とするところの『新独立論』」であり、北海道の文化的特質性を強調する北方主義者のそれとは異なることを強調する。

国民国家とナショナリズムをめぐる問題を念頭においたとき、ここでの梅棹の議論には興味ぶかい点がある。読者は、彼が「ひとつの、もしくは同じ『日本人』」が複数の国家を構成する可能性を想像し、あっさりと承認していることに気づくだろう。梅棹は、国民国家がひとつの民族により統一的に構成される国家である（はずである、べきである）という発想を採用していない。

---

[27] 同前、143頁。
[28] 同前、167頁。
[29] 同前、168頁。

> 日本人は、日本列島という一連の地域にすみ、日本という統一国家をつくっている。われわれは、このことになんの疑問ももたずにきた。われわれはこれまで、おなじ日本人を主体としながらべつべつの国をつくりうるという可能性を、あまりかんがえてみたことはない。しかし、北海道にはその可能性があるのである[30]。

もっとも、梅棹はここでいう「日本人」を構成する要件がいったい何であるかについては言及していない。すでに多くの論者によって指摘されてきたように、多民族・多文化主義を採用しなければ統治が成り立たなかった戦前・戦時中の大日本帝国のナショナリズムとは対照的に、戦後日本のナショナリズムにおいては、単一民族国家論がひろがっていった。その根底には、国民は、近代国家の設立以前から集合的同一性をもつ民族の政治的自覚をつうじて構築されるとする民族と国民の概念がある。戦後の単一民族神話が、戦前・戦時中の大日本帝国の植民地主義（多民族・多文化主義をふくむ）と戦争の歴史的過去を「否認」し、「忘却」する装置として機能してきたのである。そのかぎりにおいて、戦後日本で主流となったナショナリズムは、戦前の多民族主義からいわば「引き算」したものとしての「日本人」を主体として想像されることになった。

ここでの梅棹は、こうした戦後日本で典型的なナショナリズムの議論の文脈とはいくらか異なるところで、むしろ既存の「日本国民を切断する」発想を提示する。「異なるから独立する」のではなく、「同じ日本人のふたつの国家」を構想するのである。「同じ日本人」だからといって「ひとつの政治共同体」に帰属しなければならない理由はない。その際、「完全独立でなくたってよい。たとえば、日本連邦内の自治共和州というようなありかただってかんがえられる」として、連邦制と自治州の可能性にまで言及する[31]。ただし北海道において、その政治的主体として想定されているのが内地からの移住開拓者としての「日本人」、つまり「和人」と考えられていたことは、何度でも確認しておくべきだろう。

梅棹は、開発という名の植民地収奪が進行している現在、独立国家としての北海道がただちに実現するとは考えていない。彼は具体的な政治状況や制度にかかわる問題に立ち入らず、そのかわりに北海道が独立するためには北海道の人びとの意識が変わらなければならないと訴える。そして、すでに言及した北海道人の過剰なまでの農業への傾倒を批判し、農業中心主義からの脱却と徹底した商工業化を提唱する。北海道の近代主義の根底にある農業への志向（重農主義）こそが、内地による収奪を持続させることになるからである。

> 農業だけでは、内地の強力な統合主義に抵抗することはできず、原料生産及び内地製品の消費マーケットとして、要するに植民地の地位にとどまるほかはない。商工業をみずからのなかに育成することこそ、これからの発展の道である。……いまは、地域主義イコール重農主義であるというところに、北海道の悲劇がある。……未来の北海道についていえば、内地との同質化が進行するにつれて、内地からの商工業移民が流入し、第二次・第三次産業の人口は増大するだろう。これらの産業の労働者たちが、あたらしい居住地の植民地状態のばかばかしさに気がついて、北海道地域主義とむすびついたとき、そのときこそは独立のエネルギーがもっとも強力にはたらくときであろう。……内地からは、商工業のあたらしいエネルギーが、門口まできている。そしてそれこそは、明治以前に自由なる移民として津軽海峡をわたり、沿岸文化圏を自力で建設した、漁業労働者、商人、ながれものの系譜をひくものではないだろうか。明治はさった。いまや、あたらしい時代がめぐってきつつあるようだ[32]。

商工業の発展により脱植民地化への政治意識に目覚め（「植民地状態のばかばかしさ」）、本当の意味で明治以来つづいた農業中心の開拓時代が終わり、独立国家北海道が実現するという道筋が描き出される。その鍵を握るのは商工業の発展であり、その担い手は、ここでもふたたび内地からの

---

[30] 同前。
[31] 同前、169 頁。
[32] 同前、170–171 頁。

移民と考えられている。梅棹にとって、北海道はあくまでも内地からの移住者の空間であり、彼が「北海道思想」とよぶものは、この移住者たち（「和人」）の政治的主体化の過程として理解されていることを、いま一度指摘しておこう。

4. 「新世界」としての北海道

このような梅棹の北海道国家樹立の主張は、1960年前後の日本の人文社会科学におけるナショナリズムをめぐる議論としてはめずらしい提言に聞こえる。ひとつの主権国家内部における植民地主義的な支配構造に反発して、北海道の人びとが政治的・経済的自立を求める道筋を表現している（沖縄は当時アメリカ合州国の統治下にあった）。そのかぎりにおいて、この北海道独立論は、東京政府もしくは戦後の日本国家にたいする挑発的な批判として読むことができるようにもみえる。文明論の体裁をとりつつ、ひとりの人類学者の提言として政治的インプリケーションのつよい主張といってよいだろう。

しかしながら、問いはそこで終わらない。独立国家としての北海道を想像する梅棹の思考が認識論の水準における世界地図をつうじて作動していることに、私たちは最大限の注意を払わなくてはならない。梅棹の北海道独立論の論理構成の背後には、つねに近代世界についての認識がはたらいている。その意味で、「北海道独立論」は「文明の生態史観」の応用編として読むことができる。

事実、「北海道独立論」の後半で梅棹は、彼が日本文明の歴史的条件として考えるものを、以下のように記述する。「日本という国は、その歴史のダイナミックスにおいて、もともと西ヨーロッパ諸国とさまざまな類似性をもつ国である……。西ヨーロッパと日本とは、ユーラシア大陸の両端にあってとおくはなれていながら、しばしばおどろくほどよくにた歴史を、平行的に発展させてきたのである」[33]。「文明の生態史観」の仮説そのものである。この仮説は、近代世界における「新世界」の植民地についての次のような認識を前提としている。

> 近世において、イギリスやフランスは、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどに、新世界植民地をもった。それは……植民地ということばでよばれているけれど、性質はかなりちがうものである。かれらが到着したとき、そこにはふるい文明はなにもなかった。そこにあるものは、広大な未開の自然であった。かれらは開拓者であり、移住植民者であった。

ここに示されているのは、いうまでもなくタブラ・ラサ（白紙）としての新世界認識である。そして梅棹は、イギリスにとってのアメリカと同じ意味において、北海道を「日本の新世界」とよぶ。「アメリカやカナダが、ある意味において、ヨーロッパの派生体であるように、北海道は日本の派生体であり、そこにあるのは日本文明のヴァリエーションである。……アメリカやニュージーランドを西の新世界とすれば、北海道は東の新世界であった」[34]。それまで内地と外地（北海道）という区別を用いて北海道独自の思想史の可能性にまで言及していたにもかかわらず、奇妙なことに、文明史が直接に語られる文脈になると、北海道はあくまで日本文明の「変種」、「亜種」にすぎないと規定されることになる。

> ここ北海道にあるものは、日本内地の伝統の本流とはいくらかちがうけれど、しかしまったく異質のものではない。それは伝統的な日本文明の、新しい環境に対する適応であり、特殊化である。それは日本文明のひとつのヴァリエーションであり、変種である。地方的変種を「亜種」と名づける生物学上の命名法にしたがうならば、北海道文明は日本文明の一亜種にすぎないのである[35]。

「新世界」はあくまで「旧世界」が実現した文明の派生体（これも彼が生態学から応用した概念である）であると位置づけられる。そして彼は、北海道の政治的独立、国民国家日本からの分離独立を、植民地新大陸としての「新世界」の、宗主国からの政治的独立として捉えている。したがっ

---

[33] 同前、146頁。
[34] 同前、147頁。
[35] 同前、145頁。

て、新世界の植民地がやがて独立して国民的政治共同体へと発展することは、梅棹にとっては世界史の展開におけるいわば必然であった。北海道が東京の日本政府から独立することは、北米東部の植民地諸州やニュージーランドがイギリスから独立したのと同じ意味において、文明進化の原理に則るものと考えられた。梅棹が北海道政府の樹立を想像するときに、アメリカ合州国の独立を念頭に「日本の新世界、北海道をして、新世界の道をあゆましめよ」と語り、エイブラハム・リンカーンを連想しつつ「北海道の北海道人による、北海道のための、独立の政府」と述べたことは、彼の文明概念の枠組みからすれば、疑問の余地のないことだった[36]。

梅棹は、戦後日本の開発政策をめぐる議論の文脈では「北海道の主体性」とでもよぶべき政治的意志を強調していたにもかかわらず、じつのところ、北海道の文明史的位置づけにおいてその問題意識はどこかへ消えてしまい、西欧と平行進化を遂げたとする歴史観、日本文明観へと回収されてしまう。そのため、たとえば北海道が独立国家になるときに国民国家日本の主権やナショナリズムがいかに変化するのかといった問いは出てこない。むしろ反対に、次のような解釈を提示する。「日本の内地の姿が、北海道の未来像をしめしているのではないだろうか。開拓時代はおわった。北海道の文明が安定し、成熟するほど、内地との同質化はすすみ、北海道は内地に似てくるのではないだろうか」[37]。

つまるところ、梅棹にとって北海道を語ることは、近現代世界において彼が日本文明とよぶものの優越性を語ること以外の何ものでもなかったのではないか。北海道の政治的独立はあくまで国民国家日本の文明史的位置づけにおいて認められるものであり、北海道は、むしろ国家としての分離独立をつうじて、イデオロギー的統一体としての「日本」へと回収される論理になっている。言いかえると、論理的には、北海道の国家としての分離独立は日本文明の進化の証であり、彼自身の「文明の生態史観」仮説を裏書きしてくれるのである。この思考の形式は、戦後日本政府による開発政策のような意味での経済的収奪ではないとしても、つまるところ近代世界の了解とイデオロギーにおける認識論的な「横領」にあたると指摘することは、かならずしも言い過ぎではないように思われる。

こうした特徴をもつ梅棹の北海道論においては、いくつかの認識論的抑圧が作用していることを指摘しておかなくてはならない。北海道の歴史に直接かかわることとしては、何よりも先住民との関係である。すでにみたように、梅棹の文明論では、アメリカ合州国でもカナダでもオーストラリアでもニュージーランドでも、そして北海道でも、「新世界」は、移住以前に社会をもたない「白紙」の土地と考えられている。そのため、「異域」への接触（コンタクト）や以後の開拓そのものが巨大な暴力としてはたらく事態への想像力の余地がない。入植者の土着化は語られるが、先住民の政治的主体性（アイヌの政治的独立）の可能性は最初から視野の外におかれ、したがって、彼にとって北海道の政治的独立の問題は、あくまでも内地によって植民地化された移住者の主体性の獲得として提示されることになる。彼の文明論では、「民族」と「国民」概念そのものの近代性が不問に付されているのである。以下の引用にみられるように、先住民は「滅びゆく民族」として理解されている。

> 北海道はエゾが島であり、アイヌの国であった。そこで、おさだまりのコースがはじまる。日本人によるおどろくべき圧迫、あざむき、いつわり、そしてやがて武装反乱となる。数度にわたってアイヌ戦争は勃発し、その結果、アイヌ人口は激減するにいたる。マオリも、アメリカ・インディアンも、アイヌも、いまでは少数の人口が、ほそぼそと限定された区域のなかで生きながらえているにすぎない[38]。

梅棹の北海道論は、どこまでも移民の定住（「土着化」）による主体形成としての国家論であり、先住民アイヌの主体性にかかわる問いは、いとも簡単に片づけられてしまっている。先住民を「滅びゆく民族」と認識しながら、その認識自体が、近

---

[36] 同前、168 頁。
[37] 同前、145 頁。
[38] 同前、147–8 頁。この認識が「民族学」者としてのものであることに留意したい。

代的な文明概念にもとづく国民国家の進化・発展の枠組みの一部であることへの可能性が抑圧されている。梅棹は、内地からの移住者を中心に共同体としての北海道を想像する際、内地との関係においては内地＝東京を植民者（colonizer）として、そして北海道の人びとを植民地化された人々（colonized）として理解するかぎりにおいて、「植民地」の概念を用いてきた。しかし、移住者により構成される北海道社会が内地の植民地であることは批判的に語られても、その移住者自身が同時に植民者でもあることは不可視にされてしまう。こうした植民地主義的権力関係の複合性・重層性の認識の不在は、たんなる言及の欠落ではなく、彼が北海道と日本を語るための可能性の条件を構成しているとみるべきだろう。

より根本的な問題としては、内地と北海道という地政的かつ認識論的な「区別」そのものの政治的効果について考えざるをえない。梅棹は、政治と文化における北海道と内地の関係を同化（同質性）と分離（異質性）の問題として図式化した。この区別自体が、文明における「進歩（進化）」と「停滞」の対比にもとづく近代的な二項対立の概念図式に即したものである。文化的同化主義と政治的独立の組合せという梅棹の発想は、思考実験としてはユニークかもしれない。しかしそれは、彼自身が暗に認めているように、内地化の強化が北海道の独立を支えるという同化主義の別の表現を意味したにすぎないのである。

現代のナショナリズム論は、植民地主義や多文化主義の問題を視野にいれることで、近代国家がしばしばこうした「白紙からの開拓」という建国神話をつくりあげてしまうことを問題にしてきた。近代国民国家にとって植民地主義は例外的な事態ではなく、むしろ近代的な政治体制の構築の可能性の条件をなしているという意味において、植民地主義は近代国民国家体制の本質的な構成要素だという論点である。この考えに即していうならば、大日本帝国の崩壊は植民地主義のたんなる終焉ではなく、異なる植民地主義形態への変容として考えなければならない。北海道は（沖縄とともに）戦後日本の「植民地なき植民地主義」にとって重要な役割を与えられてきたのである。そうした視座から梅棹の北海道論を読むとき、梅棹自身は北海道の植民地状態からの独立を説くにもかかわらず、まさにその語りをつうじて、結果的には、そもそも認識論の水準において、近代国民国家日本が植民地主義なしには構築されえなかったことへの想像力が、見事なまでに抑圧されていることがわかってくる。北海道はつまるところ、内地を中心とする国民国家日本の文明としての正統性を裏書きしてくれる存在になりさがってしまっている。それは梅棹忠夫というひとりの知識人の思想や方法に固有の問題ではなく、近代的な知＝権力の装置としての民族学や文明論の問題というべきだろう。

こうして梅棹の日本（および北海道）文明論は、近代国家そのものが植民地主義をつうじて構築されてきた事実への認識を抑圧する装置の一部として機能し、あたかも「日本人」なる集合的同一性が歴史貫通的に実在してきたかのような幻想を、現在において構築することに貢献するだろう。同時代の日本思想史論としてみるとき、梅棹の北海道論には、文化・文明論のアプローチから内地との関係における不均等な構造を植民地問題として解釈し、挑発的にもひびく政治的独立を提起したことにおいて注目すべき点があるものの、その前提において認識論的抑圧がはたらいており、近現代の植民地主義とナショナリズムの蜜月を裏書きしてしまう効果をもっていることを、私たちは見逃してはならない。有名な「文明の生態史観」と同じく、「北海道独立論」もまた、その刺激的なタイトルとは裏腹に、戦後日本の単一民族ナショナリズムの構成要素へと、容易に回収されてしまうのである。

5. むすびにかえて

最後に、梅棹忠夫その人の思想史的評価とは別に、本論でとりあげた戦後北海道の諸問題に関連して、政治学・思想史の視座から重要と思われる論点を三点ほど提示し、小論を結ぶことにしたい。

ひとつは、北海道開発の現在をめぐる問題である。1951年に始まった北海道総合開発計画は、五カ年計画を順次更新し、現在も継続している。最新のものとしては、2016年3月に第8次北海道総合開発計画が閣議決定された。興味ぶかいことに、第8次計画では、北海道の食と観光が「世界に目を向けた」「戦略的産業」と位置づけられ、「豊富な地域資源とそれに裏打ちされたブランド力など、北海道が持つポテンシャルを最大限に活用することにより、2050年の長期を見据え、『世界の北海道』を目指」すと記されている[39]。

1960年に梅棹は、農業には将来性がなく、商工業への転換こそが北海道発展の方途であるとの認識を示した。半世紀後、グローバリゼーションと今日の日本の社会経済状況の変化のもとで、北海道の第一次産業はめぐりめぐって国際的な観光資源としての価値をもつようになり、それを日本政府が利用しつつあると解釈できる。また、梅棹は徹底した同化主義の発想により先住民族と文化的多様性にかかわる問題を無視したが、2016年現在、日本政府の北海道にかんする政策では、長年の紆余曲折をへて先住民族の存在と多文化主義を「承認」する方向へと転換しつつあり、公的機関の政策宣伝において「イランカラプテ」、「アイヌ文化とともに未来へ」とうたうキャンペーンも行われるようになった[40]。

いまひとつは、戦後日本における人の移動と帰属、政治共同体をめぐる問題である。戦後の北海道の「辺境の夢」（梅棹）は敗戦前後の入植から始まった。しかしその入植・開拓は新たな「棄民」を生みだしてもきた。梅棹は開拓のこうした側面のもつ意味には言及しないが、北海道への入植者のなかには、明治以来数十年にわたる開拓で未開墾のままの農業には適さない劣悪な環境に、農業知識も技術も経験もないまま送り込まれた例もあった。結果的にすくなからぬ人びとが入植地を放棄して離農したり、生存の困難に陥ったりした例が知られている。

そもそも近代国家の生権力は「人口」の管理をつうじた統治をおこなってきた。戦後北海道の開拓も、この文脈で理解する必要がある。戦後開拓全般について道場親信が指摘したように、戦後北海道の開拓は、帝国から国民国家へと変容するなかでの国家政策による棄民・難民の問題でもあり、歴史学だけでなく政治学・思想史にとっても重要な問いをふくんでいる[41]。そしてこの問いは、のちに高度経済成長とともに深刻化する公害問題や、原子力発電の事故が引き起こしている自然的・社会的環境破壊の問題にまでつながってくる。

そして最後に、梅棹が提起した政治的独立の可能性という論点について、沖縄現代史とのかかわりはやはり重要である。北海道の戦後を、戦場の経験と記憶、数十年にわたるアメリカによる統治、米軍基地問題を抱える戦後の沖縄と単純に比較することはできないとしても、「国境」をめぐる問題、中央政府との関係（開発庁の設置対象となったのは北海道と沖縄である）など、戦後国民国家の内部に折れ込んで展開する「戦後日本の植民地主義」という理論的見取り図のなかで考えること、そして「地方」に特殊な問題としてではなく、東アジアのグローバリゼーションのなかでの政治と思想の問題として問いを開いていくことが求められている。

梅棹忠夫の「北海道独立論」から半世紀が過ぎたいま、北海道の政治社会編制は彼の期待とは異なる方向に進んだ。ただし上述のような現在進行形の事態は、北海道をめぐるコロニアルな問いが解決したり消滅したことを意味するものではな

---

39 「第8次北海道総合開発計画」（2016年）、国土交通省北海道開発局（http://www.hkd.mlit.go.jp/kanribu/keikaku/keikaku-suishin.html）

40 「イランカラプテ」キャンペーン推進協議会。この協議会は内閣官房の主導のもと、国、自治体等、学術機関、アイヌ関係団体により構成される。「近年では、我が国が持つ文化の多様性の一面としてアイヌ文化が注目されており、とりわけ、北海道の特に観光分野において、『雄大な大自然』『豊かな食』といった従来の魅力に加わる新たな要素として脚光を浴びてきており、また、北海道内の民間企業等においても、アイヌ文化に対する関心が高まりつつあります。そのような中、アイヌ文化等の普及啓発をより一層推進するため、平成25年度から平成27年度の3年間を重点期間とし、民間企業や行政機関、学術機関等の連携により、アイヌ語のあいさつ『イランカラプテ』（『こんにちは』の意）を、『北海道のおもてなし』のキーワードとして普及させるキャンペーンを展開することとしました」。「イランカラプテ」キャンペーン推進協議会（http://www.irankarapte.com/content/outline.html）

41 道場の指摘によれば、「『戦後開拓』とは、『帝国』の崩壊に伴って生じる『難民』のうち、『国民』たるべき者に定住地を与え、『帝国』から『国民国家』への転換を安定的に行うための社会政策であったということができる。だがそれは、当初より『棄民』政策的な内容をもつものであった」。道場親信「戦後開拓と農民闘争――社会運動の中の『難民』体験」、『現代思想』2002年11月号、235頁。北海道の戦後開拓、棄民については以下参照。北海道戦後開拓農民史編さん委員会編『北海道戦後開拓農民史』（北海道開拓者連盟、1976年）。友田友喜雄「戦後北海道の開拓」、『ドキュメント日本人5　棄民』（學藝書林、1969年）、126–147頁。関秀志、桑原真人『北海道民のなりたち』（北海道新聞社、1995年）。宮本常一他監修『日本残酷物語5 近代の暗黒』（平凡社ライブラリー、1995年、原著は『日本残酷物語』全7巻、1959–1961年）。もしかすると今日、宮本常一らが梅棹の北海道論とほぼ同じ頃に取り組んだ『日本残酷物語』の現代版が求められているのかもしれない。

い。むしろ北海道のグローバリゼーションとでもいうべき今日の状況をつうじて、梅棹とは異なるアプローチから、国民国家と（ポスト）植民地主義をめぐる問いをたてることが求められているというべきだろう。

※本稿は2016年6月2–4日にカリフォルニア大学ロサンゼルス校で開催されたThird Annual UCLA Trans-Pacific Symposium: The Politics of Life and Death における発表（“Democracy of the Abandoned: Umesao Tadao’s ‘Independence Theory of Hokkaido’”）をもとに執筆された。平野克弥氏と Gavin Walker 氏に記して感謝したい。

参考文献（ABC 順）

花森安治「雪と土と星の町――日本紀行その3　札幌」、『暮しの手帖』第1世紀73号、1964年。
平野克弥「アイヌ＝『滅びゆく民族』と生存への祈り――コロニアルな翻訳」、『みすず』2016年8月号。
『新北海道史』全9巻（北海道、1969–81年）。
北海道開拓記念館編『北海道開拓記念館総合案内』改訂新版（北海道開拓記念館、1993年）。
北海道戦後開拓農民史編さん委員会編『北海道戦後開拓農民史』（北海道開拓者連盟、1976年）。
北海道戦後開拓史編纂委員会編『北海道戦後開拓史』（北海道、1973年）。
河野広道「北海道自由国論」、河野『続北方文化論　河野広道著作集 II』（北海道出版企画センター、1972年）。
道場親信「戦後開拓と農民闘争――社会運動の中の『難民』体験」、『現代思想』2002年11月号。
宮本常一他監修『日本残酷物語』全5巻（平凡社ライブラリー、1995年）。
百瀬響「北進と民族学――河野広道の軌跡を通じて」、中生勝美編『植民地人類学の展望』（風響社、2000年）。
テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める――アイヌが経験する近代』（みすず書房、2001年）。
中谷宇吉郎「北海道開発に消えた八百億円――われわれの税金をドブにすてた事業の全貌」、『文藝春秋』1957年4月号。
成田龍一『「戦争経験」の戦後史――語られた体験／証言／記憶』（岩波書店、2012年）。
産業計画会議編『北海道の開発はどうあるべきか――産業計画会議のリコメンデーションとその反響』（ダイヤモンド社、1957年）。
関秀志、桑原真人『北海道民のなりたち』（北海道新聞社、1995年）。
友田友喜雄「戦後北海道の開拓」、『ドキュメント日本人5　棄民』（學藝書林、1969年）。
アーノルド・J・トインビー「北海道」長谷川松治訳、『トインビー著作集』第7巻（社会思想社、1967年）。
梅棹忠夫『文明の生態史観』、『梅棹忠夫著作集』第5巻（中央公論社、1989年）。
梅棹忠夫「北海道独立論」、『梅棹忠夫著作集』第7巻（中央公論社、1990年）。
山本紀夫『梅棹忠夫――「知の探検家」の思想と生涯』（中公新書、2012年）。

ウェブサイト

「第8次北海道総合開発計画」（2016年）、国土交通省北海道開発局
http://www.hkd.mlit.go.jp/kanribu/keikaku/keikaku-suishin.html
「イランカラプテ」キャンペーン推進協議会
http://www.irankarapte.com/content/outline.html